

[大洲城周辺の文化財]

愛媛県指定史跡

中江藤樹の邸跡(至徳堂)



近江国(滋賀県)に生まれ、日本陽明学の祖として知られる中江藤樹は、加藤家の家臣であった祖父とともに10歳で米子から大洲にやってきました。27歳で大洲を離れて近江に帰郷しますが、その後も多くの大洲藩士が藤樹のもとで学び、大洲藩に好学の気風を醸成したといわれます。至徳堂は藤樹が大洲に暮らした100石取りの武家屋敷を模して、藤樹邸跡に建築された書院で、大洲高校の一角にあります。藤樹と孔子の木造が安置されているほか、「中江の水」と呼ばれる古井戸が今も残されています。

大洲市指定史跡

加藤光泰霊廟並びに
大洲藩主加藤家墓所(龍護山曹溪院)

大洲藩初代藩主加藤貞泰が父光泰(曹溪院殿)の菩提を弔うために創建し、以後、歴代藩主の菩提寺となった臨済宗妙心寺派の末寺です。創建当初は指月山曹溪院と称していましたが、天明4年(1784)に龍護山に改められました。境内には、藩祖光泰、初代貞泰、6代泰衡、8代泰行、10代泰済、11代泰幹、13代泰秋の墓所があります。

大洲市指定史跡

止善書院明倫堂跡



伊予八藩初の藩校である「止善書院明倫堂」は、中江藤樹百年忌にあたる延享4年(1747)に創設されました。藩主の死去や財政難から、計画から3年後の完成となりました。士分格以上の子弟教育の場として、陽明学者・川田雄琴も指導にあたっています。明治5年(1872)の学制発布により廃止されましたが、唯一残された土蔵は、歴史ある藩校の名残りをとどめています。

国登録有形文化財

旧加藤家住宅主屋



木造2階建ての住宅は、大正14年(1925)に旧藩主の子孫である加藤泰通氏が建築したものです。2階の3方向を雨戸の代わりに「ガラス障子」と呼ばれるガラス窓とした開放的なつくりが特徴です。他にも、旧大名家らしい格式の高い特徴が数多く見られ、映画『男はつらいよ』のロケにも使われました。敷地は、「お殿様公園」として整備され、併設する「埋蔵文化財センター」には、大洲城跡出土の遺物などが展示されています。

大洲市内から大洲城への交通



お問合せ

大洲市教育委員会 文化スポーツ課

〒795-8601 愛媛県大洲市大洲690番地の1

TEL 0893-57-9993 FAX 0893-23-5760 E-mail bunkasportska@city.ozu.ehime.jp



大洲城跡

おおずじょうせき



OZU CASTLE

大洲城の文化財

大洲城の沿革

大洲城は、肱川のほとりにある小高い丘陵に築かれた平山城で、背後に流れる肱川を天然の堀として利用し、南側に向けて二の丸、三の丸を配し、内堀と外堀をめぐらせた梯郭式の城郭です。別名で地藏ヶ嶽城、亀城とも言われています。

大洲城の築城時期については明らかではありませんが、中世の頃大洲地方の領主であった下野国(栃木県)出身の宇都宮氏によって築かれたとされています。豊臣秀吉による四国平定後は、小早川隆景、秀吉子飼いの武将・戸田勝隆、築城の名手・藤堂高虎、賤ヶ岳七本槍の一人・脇坂安治が相次いで入城しますが、近世城郭として本格的な整備が行われたのは、藤堂・脇坂の時代と考えられています。元和3年(1617)、伯耆国(鳥取県)米子から加藤貞泰が入城して以降、明治2年(1869)の版籍奉還まで大洲藩加藤家6万石の居城となりました。

明治時代になると18棟もあった櫓は次々に失われ、明治21年(1888)には天守までも取り壊されましたが、平成16年(2004)に四層四階の天守が木造により復元されました。

二の丸の見どころ



国指定重要文化財

おわたやぐら
茅綿櫓 指定日: 昭和32年6月18日

二の丸の東隅にある独立した櫓で、肱川に面し、川の上流を鉤の手に眺められる要所として、城の東の防御を担っていました。

創建年代は不明ですが、天保14年(1843)に再建されています。外隅に袴腰形の石落としを備え、その一部が格子窓

になっているのが特徴です。

洪水の被害をたびたび受けたために腐朽が著しく、昭和34年(1959)には解体修理が行われました。その際、土台の石垣が約2.6メートルかさ上げされています。

愛媛県指定有形文化財

しもだいどころ
下台所 指定日: 昭和43年3月8日

切妻造、本瓦葺の土蔵風の建造物で、内部は一部が2階建てになっています。創建年代は不明ですが、大洲城内に残る唯一の蔵の建造物です。

外部は軒裏まで漆喰で塗り込められており、城内の食糧庫としての機能を果たしていたと考えられています。明治以降は、監獄所、製糸工場の倉庫などに利用されていました。



3 天守の礎石(移設)



4 櫓下御門跡

本丸の見どころ



国指定重要文化財

こうらんやぐら
高欄櫓

指定日: 昭和32年6月18日

本丸の入口に位置し、北側の天守とは渡櫓でつながれています。

安政4年(1857)の大地震で大破しましたが、3年後の万延元年(1860)に再建されました。この時外壁が下見板張から漆喰に変更されたと考えられます。上層の屋根には軒唐破風、西南隅には袴腰形石落としが設けられていますが、最大の特徴は、窓の外へ出るための廻縁に擬宝珠の付いた高欄があることです。櫓にこのような高欄を設置する例はきわめて珍しく、天守に次ぐ高い格式の櫓と考えられます。

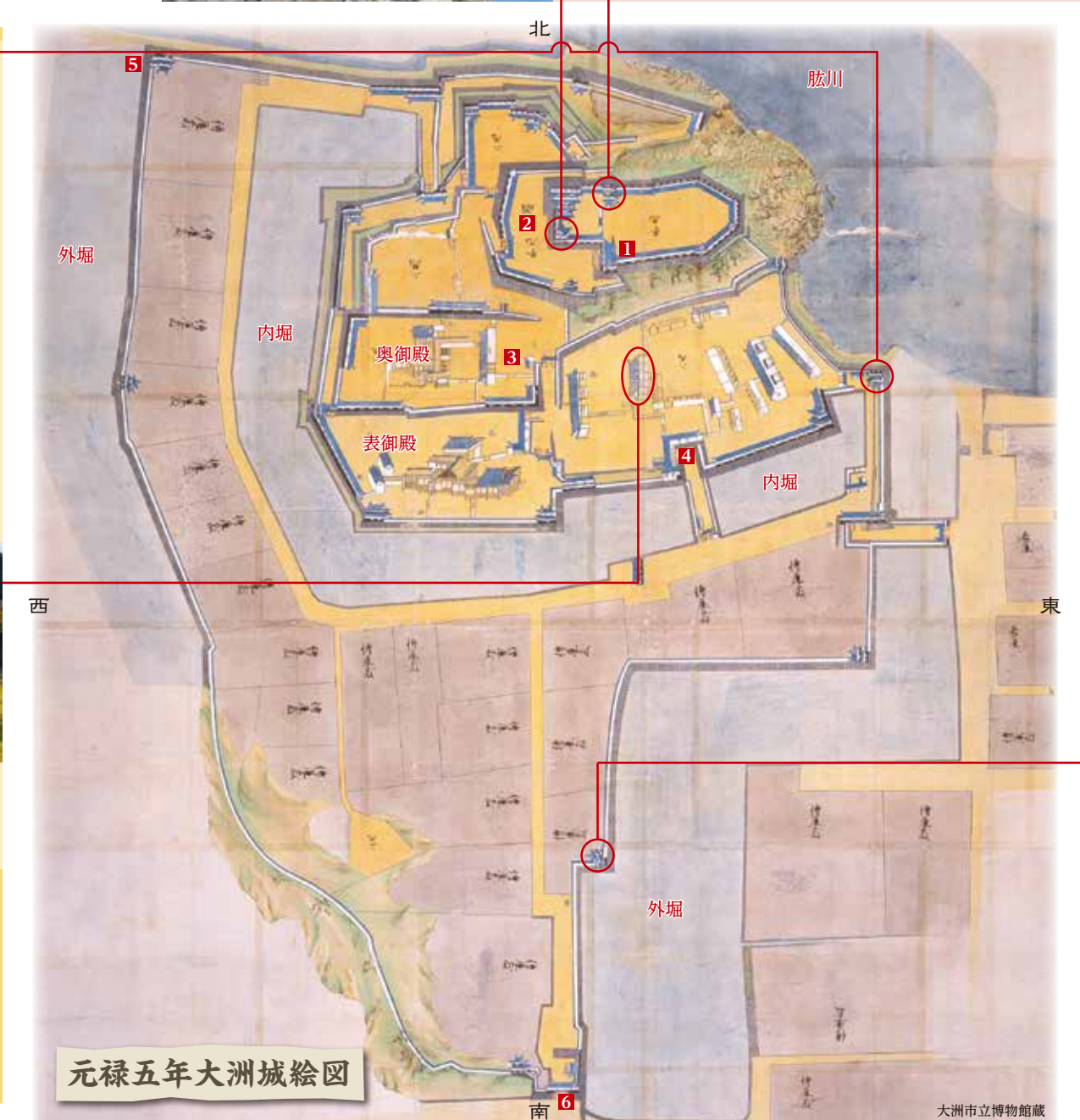
国指定重要文化財

だいどころやぐら
台所櫓

指定日: 昭和32年6月18日

大洲城で現存する4棟の櫓の中で最も大きな建物で、天守とは渡櫓でつながれています。天守にひけをとらぬ規模で、「小天守」ともいべき威容を見せています。

江戸前期に創建されたと考えられますが、安政4年(1857)の大地震で大破し、2年後の同6年に再建されました。台所の機能を備えた珍しい建物で、籠城時には城兵のための台所として使用されるため、1階の3分の1が土間となっており、排煙用の格子窓なども取り付けられています。2階北側の千鳥破風には、中央に花頭窓が設けられています。



元禄五年大洲城絵図

大洲市立博物館蔵



1 暗り門跡



2 本丸井戸

三の丸の見どころ



国指定重要文化財

さんのまるみなみすみやぐら
三の丸南陽櫓

指定日: 昭和32年6月18日

三の丸の外堀南隅に位置し、現存する大洲城の櫓の中で最も古い櫓です。創建年代は不明ですが、享保7年(1722)の火災で焼失し、44年後の明和3年(1766)に再建されました。要所には梅を使い、柱には松を使用していますが、藩の財政難を反映して、切組に役人工匠を使うなど、費用を切り詰めて再建されたことが棟札から読み取れます。

内部には太鼓壁と呼ばれる壁を厚くした部分に竹筒が埋め込まれ、外部からは見えないよう壁土で覆った隠狭間が施されています。



5 三の丸北西隅櫓跡



6 西門跡